翻　訳

「狂気」をめぐる 2 作品
—— Joe Meno, *Demons in the Spring* より ——

横　山　千　晶

それはロマンスだ（It is Romance）

フラスモア高校の模擬国連で議論が始まると，それはいつでもロマンスだ。学習指導担当のオールビー氏は学生たちが意見を述べるとき，その一人ひとりに注意を向けようする。学生たちは図書館の会議室の隅で半円になって座っている。実のところ，学生たちが実際に述べていることはオールビー氏の耳に入っていない。ワイン色のブレザーを着て，黄褐色のズボンをはいたオールビー氏は，学生たちが皆，言葉丁寧に反論を述べるときの口の形を見ていると幸せになる。黒いタートルネックを着たマーガレット・ハッチは中国の代表である。彼女は立ったまま，合板机の斜め前に座ったヘクターを指さしている。ヘクターはアルゼンチンの大使という設定だ。灰色のネクタイを締めて正装したヘクターはサシャを指さしている。黄色のスカートをはいたサシャは融通無碍な大英帝国だ。3 人は国際金利の不公平さをめぐって言い争っている。3 人の言葉はまるで音楽のようだ。信じられないほど美しいコンチェルト。オールビー氏の小さな耳の底の鼓膜を震わせる，じっとして聴いていられないほど雄弁な楽曲である。オールビー氏は今日の議論に口出しはしない。今日は担当の学生たちをただ見守り，彼らの言葉の呈する気取ったイントネーションにうっとりと聞き惚れている。彼らの若くてまだどこか自信のない声が，多音節の言葉，複雑な思考，傲慢な態度のために上下に震え，爆発し，早口にまくし立てるとき。学生の一人が手を挙げるとき。一人が問題提起をするとき。一人が自分に

あてがわれた国を擁護するために抗議を始めるとき。そんなとき，オールビー氏は学生全員を永えにいとおしいと思うのだ。確かに彼はこの全員を愛することができる。クイン・アンダーソンですら。ツイードのセーターを着てロシア代表を務める気難しがり屋のクイン・アンダーソンは，歴史のクラスで何度も宿題を出さなかったり，いい加減にやってきたりしたために，その埋め合わせとしてオールビー氏が否応なしに模擬国連に参加させている。しかし担当の国について頑として何も学ぶまいと決め込んでいるティーンエイジャーだ。それでもクインは，参加する意思を見せるとなると，マーガレットを遮り，ほかの子供たちに向かって目をむきながら，ほかの連中は，まったくもって誤解している，そして「人間なんて皆つまるところ強欲な動物なのだよ」と指摘し始める。そして，その白く並んだ歯の後ろに控える黄色い蕾さながらだった彼らの思考が，次々と花開いていくように見える。そんなときこそ，オールビー氏はついに自分が本当の愛と信じるものを見いだすのだ。

「貴国が非共産主義諸国に対して提案する経済制裁が正当たり得る理由が私にはわかりかねます」と模擬国連事務総長を務める上級生，そばかす顔のナイジェルが言っている。

「いえ，確かに正当です」とマーガレットが受けて立つ。「昨晩徹夜でインターネットを調べました。いまこそ資本主義国家が，ポスト孤立主義の中国の威力の前に兜を脱ぐときなのです。我々は銃弾で戦いを行うつもりはありません。我々の戦争は，あなた方のどの国も返済不可能な借款によって行われるのです。」

「お見事」とフランス大使のグウェンが言う。「しかし軍事報復についてご懸念はないのですか？」

「この世界の最大級の軍隊をもってしても大丈夫です。原爆 2，3 発ぐらいは言わずもがなです。私の計算によれば，中国はまずもって向かうところ敵なしです。」

「相手が韓国でなければ，ですがね」と韓国大使のウォルトが述べる。「我々は中国の騎馬軍を攻撃するためにテコンドーを編み出したのですよ。我々は素手で騎馬軍を完膚なきまでにやっつけることができるのです。そのうえ，我々

にはアメリカ合衆国の後ろ盾があります。韓国にいくつのアメリカ軍基地があるのかご存知ですか？　何千もですよ。いや，十万もです。」

「その論の展開は本当に正確と言えるかなあ」とオールビー氏が口をはさむ。彼が部屋を見回すと，皆の顔がさっと紅潮する。マーガレットは机の向こうで勝ち誇って目を細める。投票が行われる。誰かが誰かの動議に賛成する。誰かが思春期が始まったばかりのかすれ声を振り絞って，今世界で起こっていることに関して，心底真剣に何ごとかを述べている。

こんな瞬間，オールビー氏はこの子たち一人ひとり，みんなを愛しているのだと公言できるのである。こんな瞬間，オールビー氏は尊い水晶でできた生き物の束のように，ファベルジェの陶器の卵のように，彼らをその両手で掻き抱いて，みんなをコートのポケットに入れて，そのまま逃げてしまおうかと思うのだ。

私生活のほかの部分では，オールビー氏はそれほどついていない。アパートで一人ぼっちのオールビー氏は，無料配布の新聞の裏面に載っているデート欄から一つ，二つの番号に電話をかけてみる。ゲイのチャットラインを試してみる。ウェブサイトをあれこれ検索して，最低のポルノ雑誌の裏面を見て，いろいろな電話番号を探してみる。でもそんな風にして会話をしてみても何の喜びも得られない。そういった同性愛の男たちは――みんな揃って広告の艶出しページに載っている加工済みの写真（若いか，色が加えられているか，ゼウスさながらに目がきらめいているか，優しそうな顔に内気な表情が浮かべられているか）よりも，ずっと年取って聞こえるし，ずっと寂しそうだし，もっとずっと気持ち悪いぐらい必死になっている。彼らが話すと，その声は間延びして，愚鈍で心に響くものは何もないし，なんのメロディも聞こえてこない。そしてそんな男たちがぼそぼそと，オールビー氏が聞くのも嫌な，ばかげたあからさまな言葉，意地の悪い決まり文句，お粗末すぎて悲しくなるような婉曲語を口にし始めるとき。会話がもはや大胆さを失い，お決まりの意見やこうしたいという考えも残らず出きって，電話の向こうの男の舌や歯がふとしたはずみに受話器にあたってやたら大きな音を立てるとき。そんなとき，オールビー氏は相手の紳士

に，彼のために時間を取ってくれたことに感謝して素早く受話器を置く。彼が求めているのは，せわしく高鳴る心臓の鼓動やピリピリした欲望の昂(たか)ぶりなどではない。不器用なつぶやき，不規則な荒い呼吸，互いに手探りで相手の手を求めたりすることでもない。それは希望だ。それは初(うぶ)な心持ちだ。目には見えない可能性への慄(おのの)きだ。この世界で彼が望む一番のことは，ジェシカ・チンが自信たっぷりにその大きな目を細めて，なぜ現在の中東で起こっている紛争の責任が植民地制度の崩壊にあると自分が信ずるのかについて意見を述べるのを，耳にすることだ。彼があれこれ夢想することは，他者の肉体の肌の色や，硬さや自分の肉体との距離の近さとはほとんど，あるいはまったく関係がない。彼が望むのは，あのぼさぼさ頭のマシュー・アンクルが暇なとき，つまり大学科目事前履修クラスの勉強をしていたり，フェンシングの試合でまたもや勝ち進んだりする合間のほんの短い暇な時間に，暗唱したドイツ国歌を，毎晩彼のベッドの隣に立って歌ってくれることだ。オールビー氏が最も望んでいることは，模擬国連の参加者全員，ならず者のクインも含めて 11 名が，毎日うら寂しい夜に彼が家に帰ると待っていてくれて，彼が朝起床するとその全員が，鈴を鳴らすような声と何に対しても静かに赤々と輝きわたる心を抱いて――その心はまだ報われない片思いや不公平な成績ぐらいのことでしか痛んだことがない――品位を保ちながら互いに議論しあっている光景である。

その日にオールビー氏が家に戻ってみると，待っていたのは，すがすがしい顔立ちの未来の大使たちの奏でるコーラスではない，残念ながら。それはただ，昔の恋人，バリーからの電話のメッセージである。「僕がいなくても楽しみ方を忘れてはいないだろうね。もう引きこもりから抜け出ているだろうね。君のことが心配だ。できれば電話をくれよ。僕の新しい電話番号は。」オールビー氏はバリーの新しい電話番号を書き留めもせずにそのメッセージをその場で消去する。彼は顔を上げて黒いソファの上に空いた奇妙な空間を見つめる。そこには巨大なアンリ・ルソーの絵――虎が水牛と組みあっている場面を描いたもの――がかかっていたのだ。その絵もバリーと一緒にいなくなった。今あるのはその額縁の外郭に沿って付いた汚れと，その四角の中の真っさらな白い空間

だ。オールビー氏はあの絵はいつだって嫌いだったのだと思うことにし，立ち上がって壁の上のその何もない空間を見つめていたが，この汚されていない空間の完璧な孤独を考えて，突然そこに何もないことに喜びを感じる。この空虚な四角を見て，彼は我が子供たちのことを考えるのだ。「今あの子たちはどこにいるのだろう」と彼は思う。この空間を見つめながら，ほとんど声に出しそうになる。「こんなこと考えるなんて初めてだが，今この夜，彼らは何をしているのだろう。」

その秋に模擬国連はオールビー氏の要請に応えて週に 2 回，月曜日と水曜日に開催されることになる。彼はまるであとから考えついたとでもいうように，とある午後の会合の終わりに何気なくそのことを持ち出す。彼はすでに保護者許可証を作っていた。謄写版でコピーしたその紙片の隅には国連ビルの絵が入っている。その細長い四角のビルの横に，どの国かよく判別できない旗が曲線を描いて並んでいる。この絵はオールビー氏が週末をかけて丹念に仕上げたものだった。彼の描いた国連ビルの絵の前には 12 本の旗が立っている。11 本の一本一本がそれぞれの学生たちで，もう一本は彼である。誰もこのことに気がついた者はいないが，それで構わない。でも誰かが注意して見てみれば，そこには 12 本の旗が立っているのだ。2 回目の会合の追加に関して，子供たちは何も問いたださない。模擬国連などという課外活動が週に 2 度も行われることはそれだけで奇妙なことだが，参加している学生たちは全員，当然クイン・アンダーソンを除いて，その尽力と子供たちへの惜しみない献身に対して，オールビー氏に感謝する満足した親たちの署名入りの許可証を持ってくることになる。そんな親たちの一人，エミリー・バナーの雄弁なる地方判事の父親は，コピーした許可証の下に，以下のような文章を，凝った字体で書き添えている。「先生は，教師の最高の鑑です。我々が学生のときはそんな方に教えてもらえる機会など全くなかった類の教師でいらっしゃる。先生の確固として知力に満ちたそのお心が鼓動をやめませんように。そのまま勇気をもって鳴り響かせてください。」教員室の青白く灰がかった，中に入ればそのまま死んでしまいそうな雰囲気の中，オールビー氏はダンヒルのたばこをくゆらせながらこの手書

きのメッセージをじっと見つめ，泣きそうになる。喜びと罪悪感に代表される矛盾した感情に押しつぶされてしまい，彼はまさにその次の日，模擬国連の開催を中止する。しかし，模擬国連がなくなってみると，オールビー氏は子供たちの元気一杯の声，そのきらきらする目，皺ひとつなく輝く額，知性と慈悲の双方に燃える横顔が恋しくなる。そうするとオールビー氏はいても立ってもいられなくなり，その日，模擬国連のそれぞれの参加者に，各自が代表する国にふさわしい装身具を買いに出かけることになる。

次の週の会合で，オールビー氏は子供たちにこの敬意の証をプレゼントする。マーガレット・ハッチには共産党の灰色の労働者帽。ヘクターには美しく織ったベルト。サシャには黒い山高帽。クイン・アンダーソンには毛皮のウシャンカ帽。クインは思った通り，その帽子をかぶることを拒否する。それはまるで傷ついた小動物のようにクインの目の前に置かれたままで，彼は疑わしそうにその四角い帽子をにらみつけては，次にオールビー氏の青白い顔を見上げ，それからまた帽子を見て，オールビー氏を見て，と視線を行ったり来たりさせる。

この特別な会合は，メキシコ大使，派手なソンブレロをかぶったパブロのほぼ独壇場となる。彼はしゃれた黒いネッカチーフを巻いた，スペインのジェロームを糾弾する。植民地時代のメキシコに対する不公平と圧力に対してである。彼は賠償を求める。首都のどこかに新しい橋を架けるように要請する。その橋は金で作られ，大きく謝罪の言葉を彫り込んでほしい。他の学生大使たちはもちろんメキシコの意見に賛成する。ジェロームは要請を飲み，早速空想の橋建設の青写真が作られる。

その日の会合の最後にオールビー氏はみんなで一緒に新しい装いで写真を撮ろう，と提案する。フランス代表のグウェンは，たまたま高校の年次アルバムの副編集長でもあるので，常にポラロイドカメラを携えている。彼女は嬉々としてグループにポーズを取らせる。彼女はベレー帽を脱いでそれから写真をカシャッと撮る。子供たちはそれぞれの国の服装をして，鼻で笑っているクインでさえ，グウェンが写真を撮り始めると大声で笑い出す。写真のイメージが現

れてくると，模擬国連のみんなは立ってそれを見下ろす。写真の中でオールビー氏はまばゆいばかりだ。30 代後半にはとても見えない。しもぶくれでつぶれたようで羽根を抜いた鶏のような肌の色をしている彼の顔は，まさに輝いている。薄くなりつつある髪の毛はきちんと手入れされているように見える。彼は 10 代の少年のように希望に満ちて元気いっぱいだ。「みんなの分もコピーするからね。」オールビー氏は約束して，その写真を三つ揃いのベストのポケットの中に入れる。どきどきする心臓の鼓動が感じられる場所に。

またもやバリーからの留守電が入っている。「寄ってみたけれど，君はいなかった。次の恋人を見つけたのかい？　無事にやっているかどうか知りたかっただけなんだけれど。ちょっとでも時間があったら電話してくれ。」オールビー氏はこの 2 番目のメッセージも消去して，壁の上の空っぽの部分を見つめる。いってしまったルソーの絵の亡霊のような空間だ。それからベストのポケットの中に手を伸ばす。文具類を入れた引き出しから画びょうを一つ見つけ出すと，模擬国連のポラロイド写真をその場所，空っぽの真っ白な空間のど真ん中に留める。

朝起きてパジャマを着たままその写真を見つめると，オールビー氏は羞恥心でいっぱいになる。彼は写真を外すともう一度それを見る。11 の顔は皆輝きわたっている。それから写真をゴミかごに入れる。ゴミかごのそばに立ったまま 1 時間かそこら見下ろしている。その目は涙で光っている。

続く水曜日に模擬国連は一風変わった校外見学に出かける。町の風紀のよろしくない場所へ赴く。オールビー氏の考えは殺されるのならみんな揃って殺される，というものである。氏がこの差し迫った状況を乗り切るには，これしかないのである。でっち上げた架空の課外活動，「主たるアメリカの都市における現代生活と外交の関係」のために，オールビー氏は現在閉会中のバドミントン・クラブからフォードのフルサイズのバンを借りて，子供たちを乗せてダウンタウンへと向かう。西側のあるところ，うらぶれた公営住宅団地が軒を連ねる通りのこちら側から，グウェンは 2 本のロープを使ってダブルダッチで縄跳びをする 3 人の女の子たちの素晴らしい写真を撮る。のちにグウェンは，この

写真に「最も美しい貧困」という題名を付けて，この年の年次アルバムにフォトエッセイを載せることになる。まさにその場所でオールビー氏は学生たちに車が動いてくれない，と告げる。子供たちはみな携帯電話を持っていたが，オールビー氏は学生たちにまず落ち着いてくれと頼む。彼はこんなふりをする。キーを何度も回してみるが，エンジンはうんともすんとも言わないのだ。大きなバンの最後部座席に座っているクイン・アンダーソンは，目を白黒させる。その青白い顔が一番後ろの座席からせせら笑っているのが見える。オールビー氏はもう一度キーを回すふりをする。この不愛想な少年がじっとこちらを見ている気配を背中に感じながら。

「クソだな。」クインは皆に聞こえるようにぶつぶつ言う。「宿題もあるのに。母さんに電話しようっと。」

「まあ，ちょっと待て！」とオールビー氏は叫ぶ。クインの母親に会わなくてはならないと考えると，いや，それどころかこいつの不作法極まりない父親に会わなくてはならないことを考えるとぞっとする。オールビー氏が横目で見ると，突然二人の黒人の若者が現れる。立ち往生しているバンに興味深々といった様子である。ぶかぶかのフード付きのトレーナーを着て，金色の歯を剝いて，イヤリングがダイヤモンドを散りばめたような光を放っている。二人並んでオールビー氏の座る運転手席のほうに近づくと，車窓を軽く叩く。オールビー氏は目をつぶって，手短に済みますようにと願う。ことが本当に荒立つ前に気を失ってしまえばよいと願う。何よりも願うのは，子供たちを殺(あや)める前に，自分を殺してくれることだ。

「窓を開けな。」一人が言う。幅広の顔であばた面だが，とてもいい男である。

すぐにオールビー氏は手で耳を覆う。彼は思いを巡らせる。死というものはオペラ会場で過ごす素晴らしい夕べの終わりのようなものだろう。重厚なブロンズの扉が着飾った案内係によってゆっくりと開けられる。騒がしく，疲弊し，すっかり上気した紳士淑女が，どっと外に出る。その一張羅のコートや毛皮が擦れ合って，非日常的な静電気を起こす。オペラで繰り返し流れたメロディの余韻がまだあたりに漂い，夫や妻は伴侶に手を貸しながら寒々とした戸外

へと出ていく合間も，そこかしこでそのメロディを口ずさんでいる。観るべきものを観た観客たちは，最後に通りの向こうの暗闇の中に消えていき，ただ家路につくのみである。血も流れなければ，痛みもない。ただそこにあるのは一種の寂寥感である。歌われなかった歌，交わされなかった演者の口づけ，悪気のないまま削除されてしまった場面。そういったものに対する一種の失望感である。

外に立つ二人の男たちは今やどんどんと窓を叩いている。その金歯は街灯の薄明かりに照らされて残酷に光る。サシャが金切り声を上げ始める。グウェンは祈っている。ナイジェルとパブロとマシューとヘクターは，恐怖を顔に出さないように頑張っているが，その震える唇と，いつにない沈黙が，すでにその本心をあらわにしている。

「窓を開けろ！　てめえ。」外にいるチンピラが叫んでいる。「今すぐに開けろって言ってんだよ！」

オールビー氏は夢想する。マーガレット・ハッチのはらわたが引きずり出され，そのスカートは脱がされている。ジェロームは大きな毛深い耳から血を流している。ジェニファー・チンはどこかの暗い裏道で転がっており，彼女の数学の宿題はそのもう動かない身体を離れて，風に舞ってあちこちに散らばっている。罫線の引いてあるノートのページが，この何の残響もない静かな夜に何か慰めを求めようとする亡霊のように舞い上がったり，地面に落ちたりを繰り返している。オールビー氏がふと見ると，キーはまだエンジンの始動装置にささったままで，彼はそれを握っている。彼はキーを回し，変速レバーを引いて運転モードにすると，すぐに加速してほかの車との正面衝突をかわし，大胆にも赤信号を無視して走り去る。子供たちはみな大喜びで歓声を上げ，この指導教官の肩を叩き，恥ずかしげもなく互いに抱擁しあう。マーガレット・ハッチは，ここ一番に思いつき，「インターナショナル」を歌い始める。他の子供たちはしばらくの間感慨深げに聞き入っていたが，ゆっくりと，一人，また一人と唱和していく。

模擬国連は，そのあと何週間も休会となる。オールビー氏は子供たちにどうし

ても済ませなくてはならない個人的な用事があると伝える。彼は何かしら帯状疱疹にも似た原因不明で致命的な病に侵された母親をでっちあげる。子供たちは文句も言わなければ，大騒ぎもしない。最後の会合の終わりに，クイン・アンダーソンはトルストイを引きながら，彼にお悔やみの言葉を述べる。「死を前にして，彼は命と愛の必要性を感じた。彼は愛が自分を失望から救い，この愛は失望に対峙して，さらに強く清くなっていることを感じた。」

オールビー氏はこの青白い顔をした少年を見つめる。氏は妙に感動している。

「『アンナ・カレーニナ』からの引用です」とクインは付け加える。

「それは知らなかった」とオールビー氏は言う。

「ロシア文学の中で最も重要な本の一つだよ。」

感謝の炎がオールビー氏の白い頬を撫でていく。彼は少年が出ていくのを見送りながら，自分の人生がこの瞬間ほど充たされることはもうないだろうと思う。脳動脈瘤が破裂して，この命がいますぐにここで終わってくれることを夢見る。

＊＊＊

再びオールビー氏はゲイ・チャットラインに参加するようになる。またもやポルノというまがい物に没頭するようになる。いくつもの出会い系バーにまた通うようになり，いかがわしいヘルスクラブの更衣室で何時間も過ごすようになる。ジムの会員権を購入する。そしてわかるのはこのいずれも効果を発揮しない，ということだ。そして気がつくと，トレッドミルの上ですすり泣いている。そしてゲイリーという見事なまでに体を作りこんだ会計士は，ダルフール紛争については何にも知らない，と言う。そしてこの模擬国連の指導教官は気がつくと，朝の 4 時にトヨタのカローラに乗って一人で高校の周りをぐるぐる旋回している。こんなもろもろがあって，ついに彼は観念する。模擬国連は再開しなくてはならない。お昼休みにこの連絡が掲示板に貼られ，その水曜日の午後 3 時ぴったりに，11 名のメンバー全員が集合する。ナイジェルがすでに議題を作成しており，彼とマーガレット・ハッチはもう何かについて議論を交

わしている。

そのまま引き続き，実り多き冬を迎え，続いて喜びに満ちた春が訪れ，オールビー氏と模擬国連の学生大使たちは，週に 2 回一度も休まず国連を開催し続ける。学年末に近づいたころ，学生たちは皆，オハイオ州シンシナティで開かれる全米模擬国連サミットに招待される。今回オールビー氏は自分でもできるとは思ってもみなかったことをやってのけることになる。彼はわざと自分と学生用にホテルの部屋を一室だけ予約する。ホテルの部屋一室ということは，文字どおりホテルの部屋一室だけということだ。数時間貸し切りバスに乗ってきたあと，学生たちはみな疲労困憊してふらふらしている。全員モーテルの，いたるところ金ぴかで鏡張りの，派手だが安っぽいロビーに不安そうに立っている。オールビー氏は，何かしらの手違いがあって，一室しか用意されておらず，街のホテルはすべて予約で満杯で，11 人で一つの部屋を一緒に使わなくてはならないと述べる。学生たちの中には，その場で不平を訴える者はいない。あるいは，オールビー氏はその場で不平を訴える者がいるとは認めようとしない。ホテルのロビーに立ち尽くし，スーツケースや旅行鞄の周りに集まって，子供たちの中には小さくうめき声を上げる者もいるし，ため息をつく者もいる。

クイン・アンダーソンは首を横に振り，眉根を寄せて，つぶやく。「サイテー。うちの親はこの旅行に 60 ドルも払ってんだぜ。」

常に楽天家で，屈託のないグウェンは，これは最高の機会だと思う，と宣言する。「これってお泊り会みたいじゃないの」と彼女は言う。「一晩中おしゃべりして，お互いのことをもっとよく知ることができるでしょ。」

子供たちの中には賛成する者もいるが，残りの学生たちは決めかねて，何も言わずに足元の自分の持ち物をじっと見つめている。しかし，一度豪華な部屋に入ってみると，模擬国連のメンバーは全員，とても幸せになる。衣服を脱ぎ散らかし，寝袋と毛布を床に置き，ルームサービスを頼んでいいかと尋ねる。オールビー氏は胸がいっぱいになって黙ってうなずく。女の子たちは互いの髪をときあう。男の子たちは座ったままそんな女の子たちを見つめ，もしかし

て，夜の間に誰かさんの腕や脚がそっと絡まってくることはあるだろうか，と考える。みんな揃ってナイトガウンとパジャマに着替えて，子供たちは半円を描いて座ると，自分の秘密について語り始める。ジェニファー・チンのおなかには，船の形をした痣(あざ)がある。去年，火災報知機のレバーを引いたのはヘクターだ。ジェロームは自分はゲイじゃないかと心配している。マーガレット・ハッチは泳げない。ナイジェルはアトピー性皮膚炎だ。パブロはラテン語の試験に落ちた。グウェンには双子の妹がいたが，3 歳のときに死んでいる。マシューは自分の本当の父親が誰なのか知らない。クウィンは高いところが苦手。自分の番が来ると，突然サシャが泣き始める。誰にもその理由はわからない。彼女は両手で目を覆って話す。今このとき，ここにいられて本当に自分は幸せだ。彼女は言う。私は皆みたいな友達がいて，世界で一番幸運な人間よ。オールビー氏は突然死にそうな気持ちになる。彼にはどうしていいかわからない。どうにか立ち上がってそそくさと扉から外に出て，通りに出て，どこか遠く遠くへ逃げ去るべきなのだろうか。あるいは，この子たちに告白すべきなのだろうか。今ここで，この子たちと一緒にいる間に，正直に告げるべきなのだろうか。「愛している。君たちみんなにぞっこんなんだ。」

「私たちに一つも秘密を打ち明けていないわ，オールビー先生」とマーガレットが言う。その青い目は誠実さといたずら心できらきらしている。

「そろそろ別のゲームをするときかな」とオールビー氏は言う。彼は立ち上がって部屋の電気を消す。「想像力を使おうじゃないか」と彼は言う。「何かとんでもない事故が起こったと仮定しよう。」

「どんな事故？」とナイジェルが尋ねる。

「世界大戦とか。あるいは飛行機の墜落事故とか。我々だけが生き残ったと考えるんだ。次の文明の誕生は私たちにかかっている。」

「僕たちどこにいるの？」とヘクターが尋ねる。

「北極にしたら？」マーガレットが案を出す。

「いや，無人島だ。皆ここに避難しているんだ」とオールビー氏が言う。「今まで知っていたはずのものは，もうはるかかなた。みんなが愛した人々は死んでしまった。僕らはこの島に一緒にいるんだ，みんな揃って。海は美しくきら

めいて，真っ青で白く泡立つ波が打ち寄せる。そして廃墟と化した世界のごみやがれきが浜辺に打ち寄せられる。ヤシの木立はそよ風が吹くと，手足が萎えた人のように震えている。そんなとき，みんなは誰に慰めを求める？　誰に抱きしめてと頼む？　雨が降る。モンスーンの季節がやってきて家族の死体が浜辺に流れ着いて，カモメたちがその目をつついているよ。そんなとき，誰の腕を皆は求める？」

子供たちは暗闇の中で，言葉を失い，自信を失い，不安なまま互いを見つめ合う。

「電気をつけたほうがよくない？」ナイジェルが言う。

オールビー氏は動かない。彼は今や姿のない声になる。誰にも彼がどこに立っているのか，あるいは彼がまだ部屋にいるのかどうかもわからない。

「想像してごらん。僕らはこの島に閉じ込められている。この世界の中で唯一の生存者だ。みんな悲しみに打ちひしがれ，故郷をはるか離れているが，とにかく一緒にいる。自分たちの小屋を建てる。木や草で自分たちの着るものを作る。新しい規則を作る。魚を取って動物を捕って食べ物を探す。ハリケーンが来ては去る。世界の残された国々は争って殺し合う。そして遠くで見ている僕らにとって，その様子は花火のようにしか見えない。夜になると僕らは浜辺に座って，きれいな爆発を指さしながら眺めている。ここにいれば火の粉が降りかかることもないからね。僕らがそんな様子を何て呼ぶのか想像してごらん。その赤い爆発，白い爆発，青い水仙のように見える爆発をなんと名付けるだろう。僕らの作る歌を想像してごらん。僕らの作り上げる新たな文明を想像してごらん。互いに打ち明ける秘密について想像してごらん。僕らがどんなに幸せか想像してごらん。」

11 人の中の誰か，クインか女の子のうちの誰かが電気のスイッチを入れる。オールビー氏はネイビーのサテンのパジャマを着て，泣き出している。彼はモーテルの部屋の隅っこに座り，その濡れた顔を小さな両手にうずめている。その頭上で電灯の光が瞬くと，オールビー氏は嗚咽を漏らしながら，よろよろと立ち上がる。カーテンを荒々しく開けて，窓を勢いよく開ける。窓から這い出して，非常口の階段に出ようとする。しかし窓は少ししか開かない。無理やり

開けようとするが，窓はびくともしない。今や抑えきれずにむせび泣いている。もう一度だけ窓を押すと，奇妙なうなり声を上げて，散らかったベージュのカーペットの上に突然ぱたりと倒れる。子供の一人が数回オールビー氏の名前を呼んでみる。他の一人がオペレーターに電話する。できうる限り正確にこの状況を説明する彼女の声は大人びて聞こえる。他の一人は，慌てればよいのか，恥じればよいのか，心配すればよいのかわからず，自分が正確にどんな気持ちなのか測りかねている。もう一人は，両親に何と言おうかあれこれ考えている。彼にはわかっている。親は言うまでもなく自分たち自身を責めることだろう。他の一人は部屋から廊下に駆け出すと，長いこと戻ってこない。彼はモーテルのわびしいビデオゲームセンターで何時間も一人で過ごすのだ。他の一人はこれが映画だったら，この瞬間はどんな場面になるだろう，そして自分の役をどの有名な子役が演ずるだろうと思いを巡らしている。もう一人は，これは悲劇的な展開であることは間違いなく，間違いなく首になるオールビー氏は，これからどうするのだろうと考える。保険の外交員か新しいスーパーマーケットのマネージャー，なんてね。ほかの一人はこの光景から目をそらすことができない。彼はのちに大学の入学申請書に書くことになる。この瞬間こそ，世界にとって，美の必要性など忘れられたも同然なのだ，と自分が最初に気づいたときだった，と。もう一人は，上着のポケットに隠し持っていたチョコレート・バーを夢中になって食べている。他の一人はこれ以上見るに耐えられず，両手で自分の顔を覆っている。しかしその指のピンク色の柔らかな付け根の間からずっとのぞき見しているのだ。そしてもう一人は祈り始める。

月の成り立ち（The Architecture of the Moon）

月は次第におぼろになり，月曜日には輝くことをすっかりやめてしまった。さっきまでそれは夜空の中で最も大切な形状物であることは間違いなかったのに，次の瞬間消え失せ，人々の瞼の下でぼんやりと光を発する残像だけになってしまった。月はただ，月ってあったのかなあ，という問いかけ，ただの閃光と化し，それから無と化した。つまりただの記憶となってしまったのだ。月が

あるべき場所でもはや輝かなくなると，ほかの星たちも次々と光を失った。それから月も星もなくなると，ありとあらゆる電球が，光るお手本を失って次々とこと切れ始めた。結局，毎晩太陽が姿を消すや否や，ただの暗闇，完膚なきまでのまったくの光の欠如が支配することになった。哀しいことに，毎晩，人々は路頭に迷うことになった。迷った人々は自分の車の中や，家の戸口や，知らない人の庭の芝生で寝る羽目になった。暗闇の中で人々はさまよい続けた挙句，疲れ切って，恐れを知らぬみなしごさながら，その場で横になる。夜になると，建物そのものが動き回るようなのだ。道路標識もほかの標識と入れ替わる。夜になると，街路や大通りは袋小路と化した。月や星や街灯がないと，物はその場所にとどまっておらず，人々はこの世が動くその速度に気がつくのだった。その有様を見ていると，想像がつくと思うが，目が回るような感覚になる。

毎晩，トマスは望遠鏡をのぞいて漆黒の空を見つめている。幻影すら見せてくれない夜を目を細めて見つめ，父親からの電話を待っている。わずかに残った蠟燭が彼の部屋を照らしている。炎の輝きは未だに頼れる唯一の明かりのように思える。確かにトマスはもう仕事をしていない。以前は町の夜遊び紹介雑誌のイラストレーターだったが，暗闇の中で人々が道に迷い始めると，当然のことながら，雑誌はすぐさま廃刊となった。トマスは月が暗くなってから，髪の毛が伸びるのが早くなったことに気がついた。暗闇が波のように押し寄せる中で，髪の毛は彼の耳の上まで，ぼさぼさと垂れてくる。トマスは月がその昔どんなふうに見えていたのかを描いて時を過ごしている。毎晩父親が電話をかけてくるのを待っている間に何枚も何枚も絵を描く。トマスの父親は夜も働いている。彼は大手の保険会社の経理担当だ。会社の景気は上々だが，それも世の中を席巻する昏迷と厄災のおかげである。そういうわけで，就労時間も延ばさざるを得なくなったのだ。毎晩，仕事が終わると，トマスの父親は誰もいない町の中を，なすすべもなく何時間もさ迷い歩くしかない。その面長の血の気の失せた顔にしかめ面の皺を寄せて，車を駐車した場所を当てもなく探し求めるのである。何時間もそうしたあとで車を見つけ出すと，次は自分の家が隠され

てしまった場所を求めて闇の中で広がっていく通りをぐるぐると運転することになる。よく彼は諦めて，車の中で一人ぼっちで眠り，朝を待つこともある。あるいは同じように道に迷っている誰かに会うと，良かったら一緒にどうぞと声をかけて車に乗せてあげるが，この人もまた何時間も必死に探した挙句，自分の家を見つけ出すことができないのだ。そういうときは，トマスの父とその人で，車を道の片側に止めて休むことにする。しかし，見ず知らずの人と一緒という気まずさもあって，眠ることはとても難しい。いわくいいがたい緊張感のせいもあるし，その人の寝息を聞くまいとするためでもある。トマスの父親はしばしば車のエンジンをかけたままにしておく。しかし結局，何千人もの人がこの二人のように毎晩毎夜路頭に迷うことになっていた。

通常真夜中になるころ，トマスの電話は鳴り始める。今晩，トマスは真っ暗闇のダウンタウンの中を旋回する，見極めるのも困難なさまざまな形に紛れて，茶色の堅牢そうな書類鞄を一方の手で引きずっている長身の前のめりになった父親の姿を探し出そうと望遠鏡の焦点を合わせる。でもそんなものは何も見えない。望遠鏡のファインダーをのぞくと，さまざまな異なる種類の黒さが見える。両目を両手で覆ったときのような暗闇もあれば，部分的にもやもやする暗闇もあるし，ピンや針で鋭く突いたような細かい光で目がしびれるような暗闇もある。でも人間を思わせるようなものは何もない。

「もしもし」とトマスは答える。

「トマスか？」父親の声はいつもより高く，いつもより困惑して聞こえる。

「父さん，今夜は大丈夫？」

「大丈夫だよ。今は立体駐車場にいる，と思うんだけれど。正確にはよくわからないんだ。ぐるぐる回っているんだが，出口が見つからない。建てるときに出口を作り忘れたなんてことはあるかな。」

「そんなことはないと思うよ。」

「どこかに出口はあるはずだよな。もう 3 時間ぐらい探しているんだが。ただ回り続けているだけだ。」

「誰か一緒にいる？」

「いや，ほかの車も何台か周りにいるけれど，同じような調子だ。誰もここからの出口が見つけられないんだ。」

「望遠鏡で父さんのこと探してみようか。」

「いや，大丈夫だよ。ただ，だんだん心細くなってきていたんだと思う。ラジオはさっきから同じ歌ばっかりかけているんだ。夢を見ているんじゃない，ということを確かめたかったんでね。」

「いいよ，父さん。好きなだけおしゃべりに付き合うよ。」

「ありがとう。トマス。」

「じゃあ，今日はどんな日だったか教えてよ。何かいいことはあった？」

「夕食に大皿でスープを食べた。おいしかったな。」

「そりゃいいね。」

「そっちはどうだった，トマス？」

トマスは自分のアパートの部屋の散らかったねぐらを見回す。あちらこちらにくしゃくしゃに丸めた紙が投げ捨てられて山のようになっている。その中には，月が丸々と満ちて，美しい山の上にかかっていたときは確かこんな感じだったなと，この絵描きが想像するイラストが何枚かある。男女のカップルが口づけを交わす素描がある。うっとりするような月の光に二人の髪の毛が照らされている。どこか想像上の町の住民たちが夢のように美しい半月を指さしている絵がある。みんなの視線は喜びで躍っている。

「今日はほとんど絵を描いてた。」

「夜は？」と父親は尋ねる。

「今夜は大体望遠鏡を眺めて過ごしていた。」

「それで，何が見えた？」

「犬を連れた女の人がね，道を歩いていたよ。僕の向かいのアパートに住んでいる人だと思う。犬の散歩をするには遅すぎるんじゃないかな，と思ったんだ。だってちょうど暗くなり始めるときだったんだもの。日が沈むころに大声を上げ出して，どうにか間に合ってアパートに戻ってきたんだけれど。犬は一緒じゃなかったんだ。どこかで迷ったんだと思う。何時間か窓から叫んでいたけれど，まだ犬は戻ってこないのよ。」

「そりゃまた気の毒に。」

「本当だね。動物だって，何が何だかわからなくなるさ。窓の外の鳩だってもう電線の上から動こうとしないもの。すっかりやせ細っちゃってる。」

「本当にひどいもんだ」とトマスの父が言う。

「どうにか出口は見つけられそう，父さん？」

「今，ステーションワゴンのあとをついて行っている。どちらに行けばいいのかわかっているみたいなんだ。」

「わかった。出口が見つかるまで話を続けようよ。」

「ありがたいね。こっちの後ろに 10 台ぐらいついてきているよ。みんな揃って迷っているみたいだ。」

「どこかに標識は見つからない？」

「ちょっと待てよ。ああ，確かにある。同じ場所にずっとあったんだよ，トマス。このステーションワゴンの運転手についてきてよかった。母さんから電話があったら，もうすぐ家に帰るって伝えてくれ。」

「オッケー。また迷ったら，気にせず電話して。」

「そうするよ，トマス。ありがとう。」

トマスはもう一度望遠鏡で外を眺める。大きな銀色の摩天楼に見えたものは突如，廃墟となった工場に変わる。秋の暗闇の中，その並んだ 2 本の大きな煙突が灰色の煙を吐き出し始める。トマスはベッドの横に電話機を置いて，またかかってくるのに備える。30 分後に確かに電話は 2 回鳴って，そこで鳴りやむ。父が無事に家に着いたことの合図だ。横目でトマスはもう一度空を眺める。きっと月がこの大空を申し訳なさそうにこっそりと横切っていくのが見えるだろう。でも駄目だ，いつものように，何も見えない。

トマスは月の絵を描いて，昔の空の様子を懐かしく思う人々に売っている。彼が得意とするのは，夜，想像上の町の上に昇っていく月の素描だ。トマスは描いている対象のなくてはならない細部については，もう忘れてしまっている。覚えているのは，いくつかの明かり取りのような窓が，月の真ん中に一列に並んでついていること。他の絵では，月は卵に近い形をしている。卵形の月はい

くつかの銀色の雲の間で斜めになってバランスを取っている。こちらの月はその真ん中に細い割れ目が走っている。他の絵では，月の表面にはいくつかの川が流れ，湖も見える。

トマスは描いている途中で，よく鉛筆を置いて，月を見つけようと右目を望遠鏡のファインダーにあてがう。自分の想像が正しいのかどうかを確かめるためだ。でも彼の周りに重くのしかかってくる，うつろな夜の深まりゆく暗闇があるだけだ。だからまた首をひねり，月には翼が生えていたかな，と思い出そうとしながら，鉛筆をとるのである。

トマスの父親が次の夜に電話をかけてきたときに，その声はかなり取り乱している。上ずって，しどろもどろだ。トマスの耳に父親のもつれがちな足音が，真っ黒な舗装道路に響き渡るのが聞こえてくる。

「トマス？」

「ここにいるよ。」

「どこにいるのかわからないんだ。どこかを歩いているんだけれど，まだ車が見つけられない。」

「焦らないで，父さん。一緒に考えようよ。」

「もう何時間も歩いているんだ。息が切れそうだよ。」

「今はどこにいるの，父さん。周りに何があるのか教えて。」

「何か川のそばを歩いているようだな。」

「橋の上にいるの？」

「そうかもしれない。」

「橋はどんな色？」

「わからないよ。青かもしれないし，緑かもしれない。」

トマスは町の色分けされた地図帳を開いて，川にそって指を走らせながら，橋を見つけようとする。暗闇の中でちらちら揺らめく蠟燭の明かりだけが頼りだと，何が青で何が緑なのかはよくわからない。

「青か緑の橋があるかどうかよくわからないよ，父さん。」

「橋じゃないかもしれないな。いや，これはエスカレーターだ。間違ってい

た。エスカレーターに乗っているんだ。」

「どこに車を止めたかわかる？」

「わかっている。そこに行ってみたんだけれど，駐車場だと思ったところは，何か建物になっていたんだ。このまま歩き回り続ければきっと見つけられると思う。さあ，今日はどんな日だったか教えてくれよ，トマス。そうすれば気が紛れて心配事も忘れると思うから。」

トマスは自分の小さな部屋を眺めまわす。

「今日は新しい絵に取り組んでいたよ，父さん。月の絵だけれど，昇るちょっと前にまだ海に沈んでいる絵なんだ。いくつか船も浮かんでいて，すごく大きな波にもまれている。そして月の周りには海鳥たちがいるんだ。」

「月は海に沈んでなんかいなかったと思うけれどな，トマス。」

「いや，まず間違いないよ。そうだったってはっきり覚えているもの。」

「それは夢だったんじゃないかな。」

「そうかもね。」

「今日はほかに何かしたかい」とトマスの父は尋ねる。トマスの耳には父親の不安そうな息遣いが聞こえてくるように感じる。それはまるで静かに時計が時を刻むのに似ている。

「ああ，そうだ。今日の夕方僕の向かいのアパートに住んでいる例の女の子を見たよ。」

「それで？」と父親の声が急に明るくなるように思う。

「外に出て犬のことを探していた。ちゃんと時間までに戻れないんじゃないかと心配になったけれど，大丈夫だった。戻ってきたときに犬の首輪を持っていたけれど，犬はまだ見つかっていないんだ。」

「それはまったく気の毒だな。」

「しばらくの間名前を読んでいたけれど，犬は戻ってこなかった。」

「もう大丈夫だよ，トマス。駐車場を見つけたと思う，いや，いや，これは違うやつだ。でもこの辺をうろついている人がたくさんいる。もしも車が見つからなかったら，いつでもここの誰かに乗せてくれと頼むことはできるからね。」

「父さん，本当に大丈夫？」

「トマス，心配しなくていいよ。何か困ったことが起こったら，電話するから。」

トマスは受話器を戻すと，ベッドの近くに置く。夜中に目を覚ますと，電話がまだ鳴っていないことに気がつく。すぐに彼は父親の電話番号を回す。父親が出る。その声はとても優しくとても静かだ。

「父さん，大丈夫？」

「トマスか？」

「そうだよ。」

「今エレベーターの中で寝てるんだ。ほかにも 2，3 人一緒だよ。みんな今晩は車が見つけられなかったんだ。」

「そんなところで大丈夫なの？」

「大丈夫だと思うよ，トマス。朝になったら電話するからね。」

「お休み，父さん。」

「お休み。」

トマスは受話器を戻すと，もう一度望遠鏡をのぞいてみる。一瞬月かと思ったものはただ，通りの向こう側の建物に住んでいるあの女性のつらそうな白い顔である。彼女は窓を開けて犬の名前を叫んでいる。その顔はつい今しがた流したばかりの涙で濡れて，きらきらと輝いている。トマスはスケッチブックを見つけ出して，急いで月の絵を描く。そこにこの女性の悲しみに打ちひしがれた顔を描き込む。

その月が終わらないうちに，事態は嘆かわしい方向へと向かい始めた。夜になると自分がどこにいるのかわからなくなる人々，そして寄る辺なく自分の車を探して道をさまよう人々，運よくどうにか自分の車を見つけ出したというのに今度は自分の家を求めて車を乗り回し，挙句の果てに，おなじみの避難所となった運転席でハンドルにもたれて眠りこけてしまう人々。そういった人々が姿を消し始めたのである。日が昇ってみると，迷子になった人々はなぜだかわからないが，揃って忽然といなくなっていた。車は厄介な場所に停まっている。

本来の進行方向とは逆を向いて駐車しているのだ。運転手の衣服は脱ぎ散らされていた。今となって思い返してみると，日中働いている人たちがこれらの持ち主不在の衣服を朝になって見つけ出すのは，実に奇妙な場所なのである。戸棚の中，机の下，階段の吹き抜け部分，車がひっきりなしに行き交う交差点の真ん中など。これは，月が姿を消してしまったことと何か関係するのではないかと巷では言われた。音も立てない，人知及ばぬ粒子かひょっとしたらエックス線が絡んでいるのかもしれない。しかしその原因は全くもってわからずじまいである。今わかっているのは，問題は夜間に起こるということである。どこでもいい。家の外。つまり陰に隠れて見えない月の下で眠ったら最後，目には見えない毒気を帯びた光線が取り返しのつかない害を及ぼすのではあるまいか。

トマスは真剣に父親のことが心配になってくる。ある日，月の絵を描く代わりに，彼は町の詳細な地図を作ろうと思い立つ。望遠鏡を使って，トマスは父のオフィスのある建物を見つけ出す。のっぺりした特徴のない長方形の超高層ビルである。そしてその周りにあるものすべてを素早く描き始める。2，3 本のおぼつかない線を急いで引いて車の行き交う道を描く。一つ，また一つと，木立を描き，街灯を描き，交差点を描き，道路標識，それからさらに細部を描き込む。紙くず，空き缶，たばこの吸い殻。その夜に父親が電話をかけてくる前には，彼は町の中心部をほとんど網羅した地図をほぼ描き終わっている。

「トマス，信じてもらえまいが，また迷っちゃったよ。いま車の中だけれど，森みたいなところを通り過ぎるところだよ。」

「森かい？」トマスは自分の描いた地図を指で追って，トントンと軽く叩いた。

「違う。それは公園だよ，父さん。まっすぐ行って次の交差点で右に曲がって。」

「お，噴水みたいなものが見える。」

「その噴水，どんな感じ？」

「像があるな。男みたいだな。女かもしれない。はっきりわからないな。」

「それ，トランペットを持っているかい？」

「いや，持ってないな。剣みたいなものを持っている。」

トマスは点線をなぞって，剣を持った彫像を探すと，父親のいる正確な場所を見つけ出す。彼は父親に次の交差点を右に曲がるように指示する。

「いいぞ，いいぞ，トマス。もうすぐ家に着けそうだ。」

「よかった。地図の通りにこのまま行こうね。」

「お前，本当に賢いなあ。なんてすばらしいアイディアなんだ！　なんてすばらしい発想だ！」

トマスの父の声は喜びで輝くように響く。トマスは自分の描いた街並みを指でなぞって，道を左右に曲がりながら，父親が自分の人差し指の置かれた場所を無事に走行している様子を想像する。その指先に自分の心臓の鼓動が伝わってくる。1 時間もたたないうちに父親は家に到着した。受話器の向こうから，母親が手を叩いて，それから嬉しそうに叫び声を上げるのが聞こえてくるように思う。もう記憶のかなただと思っていた音と声。

次の月曜日にはこの計画すらうまくいかなくなる。月も，人々もそして世界そのものが暗黒の中で，迷子のまま姿を消していようと決めたかのようだ。夜になると町中の区画が全部近隣と入れ替わり始める。建物は向きを変えて，まるで悲しみに暮れる未亡人のようにその正面を影の中にうずめる。靄のかかったような暗闇の中で人々は次々と姿を消し始める。みんなどこに行くのだろう。脱ぎ捨てられたものが道のあたり一面重なり合って小さな山をいくつも作り上げている。この災難が次々と繰り広げる複雑な展開に気がつかず，トマスは町の地図にせっせと取り組み，目が痛くなるような細部をも描き込んでいく。日中，相も変わらず輝かしく，寵愛を受けた子供のように愛される太陽が，秋空にさんさんと輝く間，トマスは望遠鏡のファインダーに片目を押し付けて，地図に書き加えていく。電線にとまった鳥の列，かぎ状に曲がった街灯，歩道の縁石に転がったジュースの空き缶。しかし，その夜，父親が電話をかけてきたとき，地図は役に立たなくなっている。暗闇の中ですべてがひっくり返ってしまったかのようなのだ。

「本当にバラ園の隣に立っているんだね。」トマスが尋ねる。

「間違いないよ，トマス。」

その後，長い沈黙が続く。トマスは地図をなぞってバラ園を見つけ出すが，父親の言うバラ園は，あるべきはずのその場所から 20 ブロックほども離れているのだ。

「トマス，見つからないのかい？」

「父さん，どうやら描く場所を間違ってしまったみたいなんだ。ほかに見えるものを教えてくれる？」

「わからないな。真っ暗なんだ。何か博物館のようなもののそばにいるのかもしれない。正面に二つのライオンのブロンズ像がある。」

「博物館の中に入っちゃいけないよ。迷子になるだけだから。」

「いや，もう迷子になってしまってる。後ろに何があるのかさえわからないんだ。ちょっと座るね。脚がとっても痛いから，トマス。それにあたりの空気。ぴりぴりしている。吸い込むのもしんどい。胸がほてるようなんだ。」

トマスは片目を望遠鏡のファインダーに押し付けて，ちょっとした輝き，閃光，かすかな光を探そうとする。でも見えるのは漆黒の闇だ。あたかも麻布の袋を縫い合わせたカーテンのような，闇，また闇，また闇。

「気分がよくないんだ，トマス」と父さんが小さな声で言う。「頭がふらふらする。まるで浮いているようだ。横になって眠りたい気分だよ。」

「横になっちゃだめ，父さん。」

聞こえてくるのは電話回線のジージーという音だけだ。次の瞬間，トマスは父さんのいびきが聞こえるような気がする。それはまるで巻いた時計のねじがほどけていくような音だ。トマスは数秒間父さんが眠っているのに耳を澄ませているが，それから必死に囁く。「父さん，起きなきゃだめだ！　ここに地図があるからね。絶対に父さんの車を見つけてあげるから。」

「わかった，トマス」と父さんは言う。トマスの耳に父さんがあくびして，ああとうめいて，どうにか立ち上がるのが聞こえてくる。

「今どこにいるのか教えて，父さん。」

「わからないよ，トマス。あたり一面真っ青なんだ。なんだか夢の世界のようなんだ。とってもきれいだよ。ああ，木が生えている。木はみんな真っ白な

んだ。まるで水晶でできているみたいだ。今歩いているけど。きれいな木立の森がずっと続いている。」

父さんが言っているみたいな場所はこの町のどこにもないことを知りながらも，トマスは額に思いきり皺を寄せて地図を探す。彼は望遠鏡をのぞき込んで，地図を眺め，それから立ち上がると，窓を大きく開け放つ。外は森閑としている。犬を飼っていた女の人がまだ泣いているのが道の向こうから聞こえてくる。彼女は犬の名前を一度，それからもう一度叫ぶと，また泣き始める。トマスは何か目印を，何か標識を，星を，何か，何か彼のことを導いてくれるものを探してあたりを見まわす。でも今やすべては暗闇だ。道の向こうの女性は突然静かになる。彼女は窓にしっかりと錠をかける。

トマスは耳元に受話器を押し付けて尋ねる。「今は何が見える，父さん？どこにいるの？」

「どの家もみんな同じように見える。この家もあの家もだ。みんな白くて四角いんだ。とってもきれいだよ。でも扉はなんだかおかしいな。星みたいな形をしているんだ。もしかして，この家には星が住んでいるんじゃないかな。」

「あきらめちゃだめだよ，父さん。」

「とても疲れてきたよ，トマス。ちょっと横になろうかな。」

「横になったら，大変なことになるかもしれないよ。」

「とっても眠たいんだ，トマス。」

「夜通し話していてもいいからさ。」

「わかった，トマス，わかったよ。」

「よし，今どこにいる，父さん？」

「なんだか工場みたいなところの横を歩いている。」

「どんな工場なの？」

「わからないな，トマス。わからない。みんな真っ青なんだ。」

「見えるものを教えてよ，父さん。」

「大きな長方形の建物だ，それから，同じような建物がその横，そしてそのまた横に建っている。3 本の煙突が見える。煙突からは白い煙がもくもくと出ているんだ。煙，いや，煙じゃない。星屑だ。輝いている。最初は青くてそれ

から黒くなるんだ。いったい父さんはどこにいるんだと思う，トマス？」

「わからないな。」トマスは地図を顔にうんと近づける。蠟燭の光では，何を見るにも暗すぎる。線はただの線でしかない。町のスケッチの下にトマスは月の痕跡が隠れているのが見えるような気がする。

「トマス？」

「何？」

「もしかしてここは月なのかもしれない。」

トマスは父さんの緊張した息遣いがプラスチック製の受話器を通して響いてくるのを感じる。ありありと今の父さんの表情が目の前に浮かんでくる。心配のあまり目の周りに皺を寄せて，皺の刻まれた口は唖然として開いたままだ。空虚な夜が父さんの頭の周りに押し寄せてくるときのいろいろな音を想像してみる。関節炎で曲がった指で電話を握りしめているにちがいないその手を想像する。箱のような書類入れが，父さんが不安げに歩いていくのに合わせて前に，後ろにと揺れている。トマスは何か手助けになるようなことを考えようとする。自分の言葉，自分の声が何かすばらしいこと，何か役に立つことを言えないかと考えてみる。この地図が急にはっきりと見えることを考える。でも今，彼と父さんの間に広がるのは，はるかなる静寂だ。とにかくその工場が，もしも本当に月にあるのならどの場所にあるのか，そしてどうやって父さんをそこから連れ戻すのか，その方法を見つけ出さなくてはならない。とにかくどこを今，父さんが歩いているものやら，どこにその足が次に向くのか，そしてどうして月がこんなことをするのかを見つけ出さなくてはならない。トマスは目を閉じる。父さんの影が白い水晶でできた雲のような木立の下を静かに通り過ぎていくのを想像してみる。そしてついに彼は目を開けて言う。「父さん，僕はここにいるよ。ねえ，教えて。何が見えるの？」

［解説――The Dark Side of the Moon］

今回も『教養論叢』139 号に引き続き，ジョー・ミノ（Joe Meno, 1974～）の短編集，*Demons in the Spring*（Akashic Books, 2008 年）から 2 作品を取り上げた。この短編集に収められた作品はいずれも，どこかずれてしまった世界を現実と

して描き出す。そのずれはやがて深淵となって，登場人物を飲み込んでいく。その深淵が開く場所は，彼ら・彼女らの内面であることもあれば，外の世界のときもある。登場人物は広がっていくずれをどうにか自分のコントロールの範囲に収め，この状況を生き抜こうとする。

1 作目の「それはロマンスだ（It is Romance）」は自分の性的な妄想と社会的立場の隔たりに折り合いをつけようと四苦八苦する中年男性の話である。教師の鑑と親の一人から呼ばれるオールビー氏が模擬国連のクラブを率先して指導する理由は，子供たちの教育の外にある。その理由そのものを，オールビー氏も正面から見つめる勇気はどうやらないので，読者は彼の行動から推し量るしかない。彼のエロスはやがて，タナトスとなって，彼の中で膨らみ始める。表面的には同性愛者である主人公の悪戦苦闘ぶりを，読者は最初のうちこそ笑って眺めているものの，やがて彼のエロスと妄想，つまり彼の「ロマンス」は陰鬱でかなり複雑であることに気づくことになる。

物語が進むにつれ，その「ロマンス」は狂気をまとい始める。自分の中で膨らんでいくこのエロスとタナトスに折り合いをつけることができずに追い詰められていくオールビー氏の姿は，安直なスリラーに陥ることなく，かえって共感を誘う。そうして，最後にオールビー氏は自らの狂気の物語（ロマンス）の中に子供たちを登場人物として巻き込むことで，自分の欲望を果たそうとするが，結局子供たちがその後紡ぎだすだろうファルス（笑劇）の種と化してしまう。

果たしてオールビー氏の目論見は，トラジコメディとして失敗に終わったのか。それとも彼は自分の妄想と自己崩壊を愛する子供たちの前に晒すことで，破滅への欲望を満たし，自由になることができたのだろうか。解釈はさまざまであろう。少なくとも 11 人の子供たちにとっては課外活動の指導者に過ぎないオールビー氏は，12 人目のユダとして，その位置を彼ら・彼女らの人生の中にとどめることはできた。やがて成長したときに子供たちはトラウマ，あるいはファルス，あるいはロマンスとして彼の狂気の意味を客観的に振り返ることになるのだろう。模擬国連の 11 人のメンバーがそれぞれの国を代表したように，それぞれのオールビー氏の物語が出来上がるのだ。

2 作目の「月の成り立ち（The Architecture of the Moon）」は一見したところ，フ

ァンタジーだが，その美しく不思議な世界は読み進めていくうちに漆黒から青白い狂気へと化していく。月が狂気の象徴であることは周知の通りだが，この物語の中で姿を消した月は，かえって狂気を生み出す張本人として存在感を強めていく。しかし狂気とは，この真暗闇の中で相変わらず今まで通りの生活を送り続けようとする人々の努力であり，漆黒の月の存在が強まれば強まるほど，記憶が風化していくという人間の心理でもある。もはやなくなった月の姿をトマスは思い出すこともできないまま想像の月を描き続けるのだ。

やがては見えない月によって次々と改変されていく町は，そこに記憶と秩序を与えようとするトマスの地図をも無力にしていく。そして迷子になった人々は夜の闇の中で忽然と消えていくようになる。着ていた衣服が山となって残されている。ここにきて読者は，この物語がホロコーストの寓話であることに気がつく。人々はどこに行くのだろうか。少しさかのぼって読者は次の一節を思い出すだろう。

> 大きな銀色の摩天楼に見えたものは突如，廃墟となった工場に変わる。秋の暗闇の中，その並んだ 2 本の大きな煙突が灰色の煙を吐き出し始める。

深遠なる闇の中で何らかの人為的な行為が進んでいるのである。

最後にトマスの父親が巨大な博物館らしき建物を通って迷い込む，あるいは連れ去られる真っ青な世界は，強制収容所のアレゴリーである。「水晶」でできたような真っ白な木立。父親を弱らせる毒気を帯びた大気，星のような形（おそらく六芒星）をした扉を持つ白く四角い家々，3 本の煙突を持つ大きな工場で焼かれる星たち。この場面に至って，初めて光を得た父親はあたりの様子をつぶさにトマスに語ることができる。トマスはその有様をはっきりと自分の脳裏に浮かべることによって，行動の糸口をつかむため，月の狂気に初めて向き合う。

> とにかくその工場が，もしも本当に月にあるのならどの場所にあるのか，そしてどうやって父さんをそこから連れ戻すのか，その方法を見つけ出さなくてはならな

> い。とにかくどこを今，父さんが歩いているものやら，どこにその足が次に向くのか，そしてどうして月がこんなことをするのかを見つけ出さなくてはならない。（略）そしてついに彼は目を開けて言う。「父さん，僕はここにいるよ。ねえ，教えて。何が見えるの？」

目を開けたトマスは，同時に父親の目を借りて，現実を見る力を取り戻そうとする。その瞬間でこの物語は終わる。

この物語のエンディングをどう解釈したらよいのだろう。この美しい狂気の世界にトマスもまた連れていかれてしまうのか。それとも彼は断固として姿をあらわにした狂気に抗(あらが)おうと決意したのか。

この物語を読んで，1973 年にイギリスのプログレッシブ・ロック・バンド，ピンク・フロイド（Pink Floyd）が発表したコンセプト・アルバム，『狂気（*The Dark Side of the Moon*）』を想起する人々は少なくないだろう。作者のミノもこの名盤を意識していたに違いない。タイトルの The Architecture of the Moon，つまり「月の成り立ち」は，*The Dark Side of the Moon* と同じく，人間の狂気がどのようにして成り立っているのかを語っている。それは目に見えないところで進行し，人々を操作する。人々の記憶を塗り替え，ときに美化する。同時に，狂気に巻き込まれていく人々は明らかに世界が狂い始めても，それを必死で受け止め，日常であるかのようにふるまおうとする。

それでもミノの作品には希望がある。最後に狂気の複雑な成り立ちに気がついたトマスは，初めてその構造（architecture）の意味を探り，その力に抗して父親を助け出そうとするである。

今回も翻訳と解釈に当たっては多くの方々に助けていただいた。翻訳は，毎月 1 回集まってミノの短編集を読んでいる「ヨコハマ読書会」での議論から生まれたものである。今回もさまざまな解釈や，背景となる知識を提供してくれたメンバーに心から感謝する。そして英語の疑問点にいつも時間をかけて答えてくれる同僚のジェームズ・レイサイド氏とニコラス・ヘンク氏のアドバイス

なしには，今号の原稿も用意できなかった。

そして今回は 2018 年度の教養研究センター設置講座「身体知――創造的コミュニケーションと言語力」に参加してくれた慶應義塾大学通信教育課程生と通学生の 22 名にも感謝の意を表したい。本年度 8 月 13 日から 18 日までのこの集中講座で取り上げた作品の一つが「月の成り立ち」であった。朗読とディスカッションを通じて参加者とこの作品を今一度味わうことで，作品の持つ力にあらためて気づかされた。声に出して読むことで，最後のトマスの言葉には強い決意が表明されていると納得させてくれた履修者たちは，翻訳に新しい命を吹き込んでくれた。

皆さん，ありがとうございます。